

## オンライン日中交流会の利点と留意点

— 日本留学を目指す中国人学習者と日本の学部・大学院生の感想の分析をもとに —

中井陽子・丁一然・夏雨佳

キーワード：中国人日本語学習者、オンライン、日中交流会、会話でのコミュニケーション、  
実際使用のアクティビティー

### 1. はじめに

日本の教育機関で勉強する留学生数は2019年まで増加傾向にあり、その中でも中国人留学生数が2020年度まで連続1位となっている<sup>(1)</sup>。そのため、日本語学習者、とりわけ中国人日本語学習者に対して、その教育環境や特性、言語学習観等を十分踏まえて、日本での留学生活や勉強が支障なく開始できるように、来日前にも日本語コミュニケーション能力を育成しておくことが望まれる。そして、中国人学習者は漢字圏であるため漢字学習には自信があり、読み書きの習得が速い一方で、「聞く」「話す」といった音声でのコミュニケーション能力の伸び悩みが心配される(許他2014等)。また、中国人学習者は「聞く」「話す」能力を伸ばすために日本語で会話する機会を望んでおり、そうした機会を得ることで学習動機や会話能力の向上が期待できると言える(坂本2004、小林2008、関崎2009等)。

筆者の一人の中井も、2019年および2020年の3～7月に中国長春の東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校に基礎日本語教師団の団長として派遣され、日本留学を目指す中国人学習者のための日本語予備教育(10月～8月の約1年間でゼロ初級～上級レベルまで指導)の初級後半～中級後半の日本語指導に従事した。その際、中級になっても聴解や口頭能力が弱い中国人学習者が多くおり、中井が団長として担当した授業や補講等で聴解と口頭能力の強化を図っていたが、伸び悩みが見られた。そのため、ゼロ初級の段階から、日本語の音声を意識した「聞く」「話す」学習を行う機会と動機付けを高め、日本留学に備える必要性を感じた。そこで、日本語教科書の音声吹込み教材を作成・配布する、中国に留学している日本人学生に授業ボランティアとして参加してもらう等、「実際使用のアクティビティー」(ネウストプニー1991、1995)として、音声を意識した日本語学習および会話によるコミュニケーションの機会が提供できるように工夫した。だが、2020年はじめより、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で、日本人教員や日本人学生が中国に入国することができなくなり、日本と中国をオンラインで繋いで授業や交流を行わざるを得なくなった。

そこで、2020年11～12月に、「オンライン日中交流会」を実施することとした。中国側は日本留学を目指す長春の中国人学習者(初級段階)で、日本側は東京外国語大学で日本語教育学を学ぶ学生(日本人学生、外国人留学生)で、双方の学生がオンラインを通して日本語で会話して交流する機会とした。これにより、中国人学習者が音声を意識した日本語学習および会話によるコミュニケーションを行う動機付けを高め、日本留学に備えられることを目的とした。一方、日

本側の学生は、交流会を通じて、中国人学習者の日本語の特徴や日本語教育で必要なこと等について考えるきっかけとなることをねらった。

本研究では、このオンライン日中交流会に参加した中国人学習者がどのようなことを感じ、それらが「聞く」「話す」といった音声でのコミュニケーションを行う動機付けに繋がっていたのか、また今後の交流会にどのようなことを期待しているかについて、感想アンケートの記述をもとに分析する。さらに、日本側学生が交流会を通してどのようなことに気づいたか、またそれをもとに、どのように今後の自身の日本語教育の参考にしたいと思ったかについても、課題レポートに記述された感想をもとに分析する。これにより、オンライン日中交流会の利点と留意点をまとめ、今後の交流会実施のための課題を検討し、改善を図ることとする。

## 2. 先行研究

まず、2.1 で、日中交流会を実施するに当たって踏まえておくべき、中国の会話指導および中国人日本語学習者のコミュニケーション能力・言語学習観について概観する。次に、2.2 と 2.3 で、日本語学習や文化交流のために実際のコミュニケーションの機会が提供される「実際使用のアクティビティー」、および、オンライン会話交流の例とその利点・効果および留意点について述べる。これらを踏まえ、2.4 で、本研究の位置づけについて述べる。

### 2.1 中国の会話指導および中国人日本語学習者のコミュニケーション能力・言語学習観

長坂・木田 (2011) は、中国の大学で日本語教育を行う中国人教師 85 名に会話指導について質問紙調査（選択肢・自由記述）を行った。その結果、中・上級レベルの日本語授業では繰り返し、暗記、翻訳といった自由度の低い伝統的な活動が頻繁に行われていることが分かったという。

一方、許他 (2014) は、日本語を学ぶ中国人学習者（日本の大学 35 名、中国の大学 391 名、1～4 年生）に日本語のコミュニケーション能力に関する質問紙調査（自由記述）を行った。その結果、「聞く」「話す」方が「読む」「書く」よりも難しいと感じていることが分かったとしている。そして、中国人学習者からは、学生同士によるグループ討論や、日本人学生を教室に招く共同授業等の教室での「話す」活動を望む声があったという。

さらに、副島他 (2014) は、中国の大学における日本語学習者（3、4 年生）178 名に対して、日本語学習戦略と動機付けに関する質問紙調査（選択肢）および SPOT (Simple Performance Oriented Test)、JSST (Japanese Standard Speaking Test) を実施した。その結果、間違いを恐れず、習ったことをすぐ整理し、実際の言語場面で意欲的に使用していく学習者の方が会話能力が高いということが示唆されたとしている。

ここから、「聞く」「話す」といったコミュニケーション能力を伸ばすための活動を行い、中国人学習者が会話する機会を増やす必要性が見える。ただし、こうした活動を行う際は、中国人学習者の言語学習観も十分に踏まえる必要がある。楊 (2008) は、中国の大学で学ぶ中国人学習者（初級後半）27 名の言語学習観<sup>(2)</sup>について質問紙調査（選択肢）およびインタビューの分析を行った。その結果、伝統的側面（正しい日本語の勉強と積み上げ学習が大事だ）と非伝統的側面（実際に日本語を使って勉強することが大事だ等）の両面性が見られたという。そのため、日本語授業でグループワークを行う際は、学習者に活動の事前準備等をしっかりさせることが重要であり、それによって、学習者の認知的負担が減り、正確な日本語で話していることが意識でき（伝統的

側面の保障)、かつ実際に日本語が使える機会となる(非伝統的側面の保障)と指摘している。

## 2.2 実際使用のアクティビティーの機会提供

これまで、日本語学習者のコミュニケーション能力を育成していくために、教室内外で学習者が日本語母語話者等と日本語を実際に用いる機会を与える「実際使用のアクティビティー」(ネウストプニー 1991、1995)の活動が行われてきている。以下、その活動例と利点・効果および留意点について述べる。

まず、「ビジターセッション」では、教師以外の日本語母語話者や、学習者より日本語力が高い非母語話者が「ビジター」として日本語のクラスに参加し、会話や討論、発表の質疑応答をしたり、社会文化的な情報を提供したりする活動が行われる(尾崎・ネウストプニー 1986、ネウストプニー 1991、1995、村岡 1992、溝口 1996、岡部 1997、村岡・中山 2000、村岡・三牧 2000、村岡 2001、中井 2003、2012、横須賀 2003、永山他 2006、本田 2013 等)。さらに、「カンパセーション・パートナー・プログラム」や「バディー・システム」では、教室外で学習者と日本人学生が定期的に会って会話する活動が行われる(宮副他 2003、宮崎 1999 等)。

これらの「実際使用のアクティビティー」の利点・効果をまとめると、学習者の学習動機付け、教室で学んだことを用いて実際にコミュニケーションをする機会の獲得、言語能力・非言語能力の向上、話す技能・聞く技能の習得、日本語を話す自信・達成感の獲得、社会文化的知識の獲得、異文化理解能力の向上、人的ネットワーク形成等が挙げられる。

こうした「実際使用のアクティビティー」を行う際の留意点としては、例えば、「ビジターセッション」の前には、学習者は交流に際しての準備(談話技能の練習、情報の下調べ等)を徹底して行う必要があると指摘されている(ネウストプニー 1991 等)。一方、会話相手となる日本語母語話者等も、会話に積極的に参加する(村岡・三牧 2000 等)、学習者の日本語レベルに合わせて、語彙、文、発音、発話スピード、発話量を調整し、話題維持・放棄等の話題管理を行っていく(中井 2012 等)といった点が必要であるとされている。こうした会話を円滑に進めるための学習者と会話相手の調整は、「歩み寄りの姿勢」(岡崎 1994、中井 2012)であると言える。

## 2.3 オンラインでの会話交流の機会提供

海外で日本語を学習する場合、会話でのコミュニケーションの相手となる日本語母語話者等を探すのが困難なこともある。また、交通手段にも時間と経費がかかり、時間的・経済的にも交流が不可能なこともある。そのため、参加者が海外と日本に在住しながらも交流を可能とするには、オンラインの活用が有効である。特に、宮崎(2000、2002)は、日本に留学する予定の学習者が渡日前の予備教育を受ける際にもオンラインを用いたオリエンテーションやビジターセッションを行うことの可能性について指摘している。そして、これまで、オンラインを用いた、チュートリアル(尹 2013 等)、日本語会話交流(中西 2019 等)等の機会が設けられ、日本語学習者に会話によるコミュニケーションの機会が提供されてきている。

さらに、中井・夏(2021)では、2021年春に中国長春の日本語予備教育の課外活動として「日本語オンライン会話倶楽部」を設け、そこに参加する中国人日本語学習者(中国在住、中級)と日本人学生(日本の大学の中国語専攻)による会話とその参加意識を分析した。その結果、中国人学習者は会話授業で学んだ談話技能(例:意味交渉や話題選択)を日本人学生との会話に活か

そうとしていることが分かった。特に、中国人学習者が積極的に意味交渉をしつつ、自分が話しやすい話題を提供していたグループでは、話題展開がうまく進んでいた。ここから、学習者が意味交渉や話題選択が適切にできるように事前準備することが重要だと言える。

このように、オンライン会話の利点としては、遠隔地の学習者と日本語母語話者等が話す機会、談話技能や社会文化的情報が得られる点が挙げられる。一方、オンライン会話の問題点としては、視線の不一致、映像・音声の時間的なズレ、不自然な沈黙や発話重複等があると指摘されている(尹 2004、中井・夏 2021)。

## 2.4 本研究の位置づけ

以上の先行研究から、日本語の「聞く」「話す」能力を身に付けることに難しさを感じる中国人学習者にとって、音声でのコミュニケーション能力(会話能力)を高めるために、実際に会話ができる「**実際使用のアクティビティー**」の機会を与えることが重要だと言える。そして、海外で学習する中国人学習者で、対面での日本語の「**実際使用のアクティビティー**」の機会が限られている場合は、オンラインによる日本語交流が有効であると考えられる。さらに、中国人学習者が正しい日本語で話すことを重視する言語学習観を考慮に入れて、十分に交流活動に参加できるようにするためには、日本語の会話教材を配布・練習する等の事前準備ができるようにしておく必要がある。一方、会話相手となる参加者も「**歩み寄りの姿勢**」を持つことが重要である。

これらのことを踏まえ、長春の中国人学習者(初級)が日本在住の学生と交流する「**実際使用のアクティビティー**」の機会を提供するために、「**オンライン日中交流会**」を実施した。その際、事前準備のための会話教材を作成・配布して、中国人学習者の音声でのコミュニケーション能力(会話能力)を高めることを図った。本研究では、「**オンライン日中交流会**」に参加した中国人学習者と日本側学生による感想の記述をもとに、本交流会の利点と留意点を明らかにし、今後の交流会実施のための課題を検討する。

## 3. オンライン日中交流会の概要

オンライン日中交流会は、2020年11～12月に中国人学習者(中国在住)と東京外国語大学の学生(日本在住)を対象に実施した。以下、まず、3.1で、中国人学習者(中国側)と東京外国語大学の学生(日本側)の背景と交流会の目的について述べる。次に、3.2で交流会の日程・進行、3.3で交流会の事前準備・会話教材の内容について述べる。

### 3.1 中国人学習者と日本側学生の背景および交流会の目的

中国人学習者は、全員、修士課程を修了しており、長春にある東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校にて日本語予備教育を受講後(2020年10月～2021年8月)、日本の大学院博士後期課程(理科系、文科系)に留学予定の91名であった<sup>(3)</sup>。2020年10月～2021年3月の間は、長春の中国人教員が初級レベルの日本語授業を担当しており、11～12月の交流会開催のために中国側と日本側(筆者ら)が連携体制をとって実施した。学習者は、4つの班に分かれていた(各班22～23人程度)。中国人学習者の大半が2020年10月から日本語をゼロから学び始めたばかりの者(以下、未習者と呼ぶ)であったが、約20名は既習者(N1～N2レベル)であった<sup>(4)</sup>。そのため、交流会に参加した学習者の日本語レベルには差があった。なお、オンライン日中交流会

は、授業外に行われる課外活動のため、任意の参加であったが、中国側の教員の協力のもと、ほとんどの学習者が参加していた。

日本側学生は、東京外国語大学学部・大学院の日本語教育学に関する6つの授業（中井担当の学部授業3科目、大学院授業3科目）の受講生等、約70名であった。そのうち、日本人学生は約50名、外国人留学生は約20名（中国・台湾約10名、モンゴル、ベトナム、タイ、マレーシア等約10名）であった。外国人留学生は、上級以上の日本語レベル（N1以上）を有し、学部・大学院の授業に日本人学生とともに参加している者達であった。日本側学生には、日本語教育学の授業の一環で、オンライン日中交流会に参加し、そこで観察した内容・感想（交流の内容、交流中の会話の特徴で着目して分析した点、中国人学習者の様子、新しい発見・気づいたこと、自身の日本語授業で取り入れたいこと等）を課題レポート1ページ程度にまとめて後日提出することを課していた。

交流会の大きな目的は、中国人学習者と東京外国語大学の多様な背景の学生が日本語で交流を図ることであった。その上で、中国人学習者には、交流を通して「**実際使用のアクティビティ**」の機会を得ることで、音声を意識した日本語学習と会話によるコミュニケーションの動機を高めるとともに、日本に留学した後、日本語母語話者だけでなく、様々な留学生と日本語でコミュニケーションを行う喜びを感じるきっかけとなることをねらった。一方、日本側学生には、海外の初級日本語学習者と交流するコミュニケーション体験をすることで、学習者の日本語使用の特徴を観察し、日本語を調整しながら話す「**歩み寄りの姿勢**」（岡崎1994、中井2012）を意識化できるようにするとともに、日本語教育で必要な点を考える機会となることをねらった。

### 3.2 交流会の日程・進行

日中交流会の事前準備としては、まず、中国側の教員と連絡を取り、表1のように、日程と参加者割り、および、会話の話題・活動内容を決めた。交流会は、セッション1～4まで、全12回行うこととした。まず、セッション1～3では、中国人学習者の既習の語彙・文型を使った挨拶、自己紹介、簡単な質疑応答を会話教材をもとに行うこととした。次に、セッション4では、中国人学習者によるスピーチとその質疑応答、および自由会話を行うこととした。中国人学習者は、セッション1～4まで各1回以上、参加できるようにした（計4回以上）。セッション1と4では、各班で日にちを変えて授業外で参加したが、いずれの日も会話の話題・活動内容は同じものを扱った。セッション2と3は、日本側の日本語教育学に関する授業時間中にそれぞれ実施し、日本側学生（当該授業受講生）と中国人学習者がほぼ全員参加した<sup>(5)</sup>。日本側学生には、交流会に全部で1回以上参加することを課し、セッション1と4は参加できる日を各自選び、参加登録した上で参加することとした。そのため、日本側学生の中には、複数回にわたって参加登録している者もいた。

交流会当日は、オンライン会議ツール Zoom を用いて各30分間程度、実施した。セッション1と4は、日本側学生が毎回5-15人程度参加し、セッション2は10人、セッション3は30人参加した。教員は、日本人教員（筆者のうち中井）の他、中国側教員も1～2名毎回参加した。日本人教員の日本語での説明が未習者にとって難しいと判断される場合は、適宜、中国側教員、または日本側の中国人留学生に中国語通訳をしてもらった。

交流会では、まず、日本人教員が交流会の全体的な進め方の確認をした。そして、各参加者の

表1 オンライン日中交流会の日程

セッション	日時・参加者（各30分間程度）	会話の話題・活動内容
1.	11月2日(月):中国人学習者1班(22人) 11月3日(火):中国人学習者2班(23人) 11月4日(水):中国人学習者3班(23人) 11月5日(木):中国人学習者4班(23人) 11月6日(金):中国人学習者4班半分&希望者	中国:1630-17:00 日本:17:30-18:00 ・自己紹介 ・語彙・文型を使った会話
2.	11月5日(木):中国人学習者全員(91人)	中国:12:30-13:00
3.	11月11日(水):中国人学習者1,2,3班(68人)	日本:13:30-14:00
4.	11月30日(月):中国人学習者1班(22人) 12月1日(火):中国人学習者2班(23人) 12月2日(水):中国人学習者3班(23人) 12月3日(木):中国人学習者4班(23人) 12月4日(金):中国人学習者4班半分&希望者	中国:16:30-17:00 日本:17:30-18:00 ・自己紹介 ・中国人学習者のスピーチと質疑応答(自己紹介、出身地、趣味、食べ物の紹介) ・自由会話(趣味、食べ物、生活等)

Zoom 名前表示の部分に自身の名前と振り仮名を示すように指示した。その後、Zoom ブレイクアウト・セッション機能を用いて、中国人学習者2～4名と日本側学生1～2名が1つのグループになるようにランダムに分けて<sup>(6)</sup>、交流を行った。日本側教員、中国側教員もブレイクアウト・セッションを移動しながら各グループの様子を観察し、適宜、交流の補助等を行った。セッション1、2、3は、10分程度会話した後、グループを入れ替え、新しいグループでさらに10分程度会話を行い、繰り返し同じ話題で異なるメンバーで話せるようにした。セッション4は、中国人学習者のスピーチとその質疑応答のため、20分程度の時間を取り、グループ替えは行わなかった。なお、毎回のセッションで、中国人学習者と日本側学生は、初対面同士で会話する状態であった。

最後に、ブレイクアウト・セッションを終了した後、全体で交流会の感想を口頭で簡単に共有した。まず中国人学習者全員に対して交流会の感想を聞き、日本語で簡単に答えてもらった(例:楽しかった)。その後、日本側学生にも日本語で感想を述べてもらい、適宜、中国語の通訳を入れた。日本側の中国人留学生には、日本語と中国語の両言語で感想を述べてもらった。最後に、日本人教員から中国人学習者の積極的な会話参加や、回数を重ねるごとに会話能力の向上が認められた点等を褒め、今後も日本語で様々な国・地域の人々と積極的に交流して欲しいことを伝えて、毎回の交流会を終えた。

### 3.3 交流会の事前準備・会話教材の内容

表2は、交流会の活動内容と会話教材の内容をまとめたものである。今回の交流会は、「実際のアクティビティ」として中国人学習者が日本語の会話でのコミュニケーションを行う機会を提供するものであった。だが、特に日本語学習を開始して1、2か月の未習者は、まだ学習した語彙・文型も限られており、十分に口頭運用ができない段階だと考えられた。そこで、教師が会話教材を作成・配布・説明し、未

表2 交流会の活動内容と会話教材の内容

内容指定の会話：セッション1～3（計7回）
(1) 意味交渉のモデル表現： 聞き返し、オンラインチャットでの漢字記入等
(2) 指定の話題とモデル会話： 挨拶、自己紹介(名前、出身)、日本語・外国語学習、趣味
(3) その他の話題とモデル質問文： 好きな食べ物・飲み物、買い物、週末、勉強、留学等
スピーチ・質疑応答と自由会話：セッション4（計5回）
(4) モデルスピーチと穴埋め作文： 自己紹介、趣味、出身地、食べ物の紹介

習者が交流会の事前準備として会話の自主練習をしておけるようにした。これにより、中国人学習者が正しい日本語で話すことを重視する傾向にあるという言語学習観を考慮に入れつつ、未習者も十分に交流活動に参加できることをねらった。

セッション1～3用の会話教材は、【資料1】のように、中井(2010)を参考に、日本語、振り仮名、ローマ字、中国語翻訳を付して作成し、教師の読み上げ音声も配布した。会話教材の内容としては、日本語で聞いて分からない時のための意味交渉のモデル表現の他、挨拶、自己紹介、日本語・外国語学習、趣味等の指定の話題について既習の語彙・文型を用いて話すためのモデル会話文を示した。この他、時間が余った場合、既習の学習者のために、その他の話題とモデル質問文もリストとして示しておいた。

さらに、セッション4用には、4つのテーマ(自己紹介、趣味、出身地、食べ物の紹介)のモデルスピーチの教材を作成・配布した。それをもとに、中国人学習者がテーマを1つ選んでスピーチ原稿を作成し、中国人教師の添削を受けた後、各自 OJAD<sup>(7)</sup> で発音練習を行い、スピーチの準備を行った。

交流会を行う2週間前に、オンライン会議ツール Zoom の接続テストを行い、中国人学習者と中国側教員全員が参加し、日本側の教員(中井)が交流会の趣旨と準備、当日の進め方等について説明を行った。そして、Zoom 接続の有無や不具合を確認するとともに、交流会の準備として会話教材・音声教材を用いてよく練習しておくように伝えた。さらに、注意点として、交流会で積極的に日本語を用いて参加し、自分からも話題を提供していくこと、日本語が分からない場合は、会話教材の「1」表現:日本語が分かりません」の表現や、Zoom チャットで日本語の意味確認をすることを伝えた。

一方、日本側学生にも、上記の会話教材を事前に配布・説明し、交流会当日に会話教材の内容をもとに、中国人学習者の様子をよく観察しつつ、日本語レベルに合わせてやさしい日本語を使いながら、質疑応答を中心とした会話を積極的にするように指示しておいた。特に、中国人学習者のほとんどが10月から日本語学習を開始したばかりの未習者であるため、会話教材を Zoom 画面共有して会話をしている箇所をカーソルで指しながら話す、日本語が通じない場合は Zoom チャットで筆談する、絵や写真を見せる、ジェスチャーを使う、英語や中国語を少し使う等、学習者の様子をよく観察して日本語を調整しながら会話をするといった「歩み寄りの姿勢」で臨むように伝えておいた。

#### 4. 中国人学習者のアンケート記述の分析

交流会後、中国人学習者に「感想アンケート」として、交流会がどうであったかという感想や今後の交流会に要望する点・改善点等を中国語か日本語で自由記述してもらい、83名分(未習者68名、既習者15名)のデータが得られた。そのデータの中で、交流会に関して、「a.良かった点」、および、「b. 要望する点」に言及している部分を抽出し、記述内容ごとに項目名を付けて下位分類した。そして、各項目について記述した学習者数を未習者と既習者に分けて集計した結果、全347件(未習者278件、既習者69件)の記述のうち、「a.良かった点」(全295件のうち、未習者240件、既習者55件)、および、「b. 要望する点」(全52件のうち、未習者38件、既習者14件)の記述が見られた。さらに、未習者68名、既習者15名、合計83名の学習者数をそれぞれ分母として、各項目の記述件数を割り、何パーセントの学習者が各項目について記述している

か割合も出した。

以下、4.1で交流会の「a.良かった点」に関する記述、4.2で交流会に「b.要望する点」に関する記述を分析する。なお、学習者の記述例は、中国語で書かれたものは和訳し、日本語で書かれたものは「ママ」とした。さらに、筆者らがブレイクアウト・セッションに参加した際に観察した各グループの様子も補足として述べる。

#### 4.1 交流会の良かった点

表3は、中国人学習者による交流会に関する感想アンケートの記述のうち、「a.良かった点」として分類したものを未習者、既習者の記述件数ごとに集計した結果である。「a.良かった点」は、「①会話教材」、「②会話参加の体験」、「③情意面」、「④動機付け」、「⑤オンラインの利用」の5項目に分類され、さらに17の下位項目が見られた。この中の上位5項目を見ると、「②会話参加の体験」の項目に集中し、「実際のコミュニケーションの体験」(44.6%)、「学習内容の実践」(31.3%)、「会話能力の向上」(48.2%)、「会話相手による学習者の会話参加の促進」(43.4%)に関する記述をした学習者が多かった。さらに、「④動機付け」の「日本語学習への意欲(他者からの励まし・刺激)」(50.6%)に関する記述が最も多く、半数以上の学習者が言及していた。以下、「a.良かった点」に関する各項目の学習者(未習者、既習者)の記述例を具体的にみる。

表3 中国人学習者の感想アンケート記述「a.良かった点」の集計結果

項目	下位項目	未習者68名中 記述件数		既習者15名中 記述件数		全学習者83名中 記述件数	
①会話教材	会話内容の指定	8	11.8%	0	0.0%	8	9.6%
②会話参加の体験	実際のコミュニケーションの体験	30	44.1%	7	46.7%	37	44.6%
	学習内容の実践	22	32.4%	4	26.7%	26	31.3%
	会話能力の向上	35	51.5%	5	33.3%	40	48.2%
	学習方法の知識獲得	5	7.4%	1	6.7%	6	7.2%
	社会・文化的知識の共有	21	30.9%	4	26.7%	25	30.1%
	会話相手による学習者の会話参加の促進	28	41.2%	8	53.3%	36	43.4%
	媒介語の使用による理解の促進	1	1.5%	0	0.0%	1	1.2%
	人間関係の構築	5	7.4%	0	0.0%	5	6.0%
③情意面	緊張の軽減	3	4.4%	1	6.7%	4	4.8%
	自信の獲得	7	10.3%	2	13.3%	9	10.8%
	達成感	4	5.9%	1	6.7%	5	6.0%
	喜び	13	19.1%	9	60.0%	22	26.5%
④動機付け	日本語学習への意欲(他者からの励まし・刺激)	35	51.5%	7	46.7%	42	50.6%
	交流の継続	20	29.4%	5	33.3%	25	30.1%
	日本留学への期待	3	4.4%	0	0.0%	3	3.6%
⑤オンラインの利用	利便性	0	0.0%	1	6.7%	1	1.2%
合計		240		55		295	

まず、「①会話教材」としては、「会話内容の指定」(9.6%)がされていたため、共通の話題があり、会話しやすかったといった記述が見られ、これらは全て未習者(11.8%)のものであった。ここから、未習者のために会話教材を準備しておくことは、やはり重要であったことが分かる。



## ①会話教材

会話内容の指定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンライン交流会の前に、事前にトピックが指示され、その後、グループディスカッションの形を取りましたので、東京外国語大学の先生や学生とより共通の話題がありました。(C1 未習、和訳)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最後の交流会でスピーチのトピックが指示されて、質疑応答をしました。前の自由会話に比べて話す内容が絞られており、事前にスピーチ原稿を準備したため、会話が円滑で自然になりました。(C2 未習、和訳)</li> </ul>

次に、「②会話参加の体験」としては、「実際のコミュニケーションの体験」(44.6%)、「学習内容の実践」(31.3%)、「会話能力の向上」(48.2%)、「学習方法の知識獲得」(7.2%)、「社会・文化的知識の共有」(30.1%)、「会話相手による学習者の会話参加の促進」(43.4%)、「媒介語の使用による理解の促進」(1.2%)、「人間関係の構築」(6.0%)に関する記述が見られた。

特に、「実際のコミュニケーションの体験」、「学習内容の実践」の記述から、中国人学習者が交流会で日本側学生（日本人学生、外国人留学生）と会話でのコミュニケーションをすることで、日本語の「実際使用のアクティビティ」の機会を得ていたと言える。また、「会話能力の向上」は、未習者（51.5%）、既習者（33.3%）ともに記述が見られたが、未習者の方が参加回数が増えるにつれて会話能力の向上が自覚できたと述べていた者が多かった。また、「学習方法の知識獲得」として、交流会参加によって学習方法が自身で掴めた者や、会話相手の日本側の中国人留学生が先輩としての助言をしてきて参考になった者等がいたようである。「社会・文化的知識の共有」では、日本と中国の文化を学び合うとともに、日本側の中国人留学生から日本の生活情報を得ることもできたことがうかがえる。「会話相手による学習者の会話参加の促進」、「媒介語の使用による理解の促進」に関しては、日本側学生が会話をリードしながら分かりやすく話す、または日本側の中国人留学生が学習者の日本語レベルに合わせて質問したり中国語と日本語の通訳をしたりする、といった「歩み寄りの姿勢」を見せたため、学習者が会話を楽しめた様子が分かる。

## ②会話参加の体験

実際のコミュニケーションの体験	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業で語彙や文法を学び、文章を作ることもありますが、実際の日常会話では日本語で話すのは難しいので、このような交流は日本語で話す機会を与えてくれました。(C3 未習、和訳)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語母語話者とコミュニケーションをすることができました。(C4 未習、和訳)</li> </ul>
学習内容の実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学んだ語彙や文法を応用して、教室での学習内容をよく定着させることができました。(C5 未習、和訳)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学んだ文法や語彙を振り返れました。(C6 未習、和訳)</li> </ul>
会話能力の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今度の交流のおかげで、口頭での日本語表現力がある程度向上したと思います。(C7 既習、和訳)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初は一言も話せませんでしたが、何度も参加するうちに、まとまった意見が述べられるようになりました。(C8 未習、和訳)</li> </ul>
学習方法の知識獲得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この貴重な機会で、日本語学習のどこを頑張ればいいのか、どうやって学ぶべきかが分かりました。(C9 未習、和訳)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の日本語学習者から、外国人がいかに早く日本語を習得できるかという技を学びました。東外大の中国人留学生は、日本語を学んだ経験やその過程で遭遇した困難やその克服方法のほか、中国人の視点から見た日本語学習の正しい方法をたくさん教えてくれました。(C10 未習、和訳)</li> </ul>

社会・文化的知識の共有	・東外大の学生達と様々な話題について話し合うことで、多くの日本文化を学び、日本の食べ物や習慣について学びました。同時に、東外大の学生達に中国料理や文化を紹介しました。(C11 未習、和訳)
	・中国と日本の文化の違いにも気づけました。(C12 未習、和訳)
	・日本での生活に関して中国人留学生と会話した時は、日本の物価や家賃等の将来の留学に関連する問題について気楽に話すことができ、とても役に立ちました。(C13 未習、和訳)
会話相手による学習者の会話参加の促進	・会話に参加した東外大の学生達は、非常に熱心で辛抱強く会話をリードして、話すスピードもゆっくりしてくれたので、会話全体を通して非常に満足しました。(C2 未習、和訳)
	・聞き取りやすくするために、相手がゆっくりと話しかけてくれました。(C14 既習、和訳)
媒介語の使用による理解の促進	・私は使い慣れていない日本語表現と中国語、英語、身振りをを用いて、日本人学生と日常の話題について話しました。流暢には話せませんでしたでしたが、すごく楽しかったです。(C15 未習、和訳)
	・東外大の中国人学生達の質問の種類と深さから、私達の日本語学習の内容と進度をよく理解していることが分かりました。私達が日本語でうまく伝えられない時は、彼らが私達の中国語を通訳してくれたので、会話を円滑に進めることができました。(C16 未習、和訳)
人間関係の構築	・私達のために、楽しい課外活動のひとつと、より多くの日本の友人と知り合う機会を作ってくださいました。そればかりでなく、ある意味、日中両国の友情の架け橋がより堅固なものとなったと思います。(C17 未習、和訳)
	・東外大の学生と予備学校の学生がより良い人間関係を構築できました。(C18 未習、和訳)

そして、「③情意面」としては、「緊張の軽減」(4.8%)、「自信の獲得」(10.8%)、「達成感」(6.0%)、「喜び」(26.5%)に関する記述が見られた。特に、未習者の方が交流会参加を数回重ねるうちに、「緊張の軽減」を自覚したと記述する者が多かった。そして、「喜び」の記述は、未習者(19.1%)より既習者(60.0%)の方が割合が高かった。

### ③情意面

緊張の軽減	・3回の交流を経て、4回目の交流会では基本的に緊張はなくなりました。(C19 未習、和訳)
	・何回目かの交流会では緊張がなくなり、全力で会話能力を伸ばす訓練を始めました。(C8 未習、和訳)
自信の獲得	・最初は自信がなく、口を開いて日本語を話すこともできませんでしたが、だんだん積極的に話したり、共有したり、理解したりするようになりました。(C14 既習、和訳)
	・日本の学生と練習の中に自分の勇気と自信がだんだん増えています。(C20 既習、ママ)
達成感	・最初はほんの数語しか理解できず、簡単な文を少しずつ言っていました。わずか2か月で、短い作文を書いて発表するまでできるようになり、自分の急速な進歩に驚き、興奮しました。(C21 未習、和訳)
	・4回目の交流会では、英語とジェスチャーを使う必要がなくなり、基本的に簡単な単語で文が作れるようになったので、小さな達成感がありました。(C10 未習、和訳)
喜び	・日本語に初めて触れる段階で、日本人の先生や学生と交流の機会が持てて、とても嬉しいです。(C22 未習、和訳)
	・歳が近い日本人学生と交流する機会を作ってください感謝しています。毎回の交流はとても楽しかったです。(C14 既習、和訳)

さらに、「④動機付け」としては、「日本語学習への意欲(他者からの励まし・刺激)」(50.6%)、「交流の継続」(30.1%)、「日本留学への期待」(3.6%)に関する記述が見られた。特に、会話相手に褒められたり、他の中国人学習者の高い日本語能力に触れたりすることで、「日本語学習への意

欲」を高めていたようである。

#### ④動機付け

日本語学習への意欲 (他者からの励まし ・刺激)	・日本語学習で最も難しいのは発音だと私が言ったら、交流相手は私のスピーチの全てが理解できたので発音は心配しなくてもいいと言ってくれたから、とても励ましになりました。(C23 未習、和訳) ・予備学校の学生達の優れた日本語能力を見て、真剣に日本語を勉強するようになりました。(C8 未習、和訳)
交流の継続	・今後の日本語学習で母語話者の先生や学生とコミュニケーションする機会がもっと増えて欲しいです。(C24 未習、和訳) ・この機会を大切に、今後も日本の友人との交流を続けていきたいと思っています。(C14 既習、和訳)
日本留学への期待	・これから日本の生活はとても楽しみにしています。(C25 未習、ママ) ・今回の交流によって、日本人学生の優しさを感じ、日本への良い印象を強め、さらに将来の日本留学への憧れを深めました。(C26 未習、和訳)

最後に、「⑤オンライン利用」としては、便利で実用的だといった「利便性」(1.2%)に関する記述が見られた。

#### ⑤オンラインの利用

利便性	・オンライン交流の場は便利で実用的です。(C27 既習、和訳)
-----	---------------------------------

以上のような交流会の「a.良かった点」の記述は、数回の交流会に参加する中で徐々に感じられてきた学習者もいたようである。以下は、交流会参加に伴った意識の変化が述べられている学習者(C19)の記述例の要約である。ここから、学習者は数回の交流会に参加することで、徐々に日本側学生と会話することに慣れ、自信を付け、通常の日本語授業での学習の進展とあいまって、会話能力を向上させていった様子が分かる。実際に、筆者らも、交流会を重ねるごとに、学習者達が自己紹介や特定の話題等の同じような会話を繰り返すことで、次第に自信を持って流暢に話せるようになっていく変化が観察できた。

#### 交流会参加による意識変化 (C19 未習者、和訳)

交流会に参加する2か月前は、日本人学生と簡単に交流できるということが想像もできませんでした。そのため、1回目の交流会では、自分の下手な日本語がグループの他の学生に影響を与えるのではないかと心配しました。そして、実際もそうで、その時は上手くできませんでした。少し日本語を勉強していましたが、日本人学生に質問されて、学んだ言葉ですぐに文を組み立てることができませんでした。緊張した雰囲気の中で、話がさらに乱れました。

交流会の後、私はリスニングの練習に集中しました。そして、2回目の交流会では、状況は少し改善され、緊張も和らぎました。簡単な表現やジェスチャーで意味を伝えられるようになりましたが、まだ下手なので笑いの種になりました。

3回目の交流会では、日本人学生が増えたからかもしれませんが、日本人学生と1対1の対話ことができました。しかし、1対1のコミュニケーションで、沈黙してしまうこともありました。この学生は常に辛抱強く会話をリードしてくれました。

4回目の交流会では基本的に緊張はなくなりましたが、それでもうまく会話できたとは言えません。今後の勉強を通して、日本語の聴解と口頭能力をさらに強化していきたいと思えます！次の交流会でもっとうまく会話することを目指します。

このように、今回のオンライン日中交流会の利点としては、中国人学習者が実際の「②会話参加の体験」を複数回行うことによって、「実際のコミュニケーションの体験」と「学習内容の実践」をしつつ、「会話能力の向上」「社会・文化的知識の共有」ができる機会となった点が挙げられる。それには、「会話相手による学習者の会話参加の促進」といった「歩み寄りの姿勢」も重要であると考えられる。これらにより、学習者の「③情意面」も満たされ、日本語学習と日本留学への「④動機付け」がより高くなったと言えよう。なお、2.2の先行研究で指摘されている「実際使用のアクティビティー」の利点・効果でも、このような点が挙げられている。だが、今回の交流会では、特に「会話相手による学習者の会話参加の促進」や「日本語学習への意欲（他者からの励まし・刺激）」といった会話相手の日本側学生と他の中国人学習者との会話から励まされた中国人学習者が半数近くいたことが特徴だとも言える。

#### 4.2 交流会に要望する点

表4は、中国人学習者による交流会に関する感想アンケートの記述のうち、「b. 要望する点」として分類したものを未習者、既習者の記述件数ごとに集計した結果である。「b. 要望する点」は、「①会話教材」、「②会話参加の仕方」、「③情意面」、「④開催方法」、「⑤オンラインの利用」の5項目に分類され、さらに10の下位項目が見られた。この中の上位5項目を見ると、「①会話教材」、「②会話参加の仕方」、「④開催方法」の項目で、「会話内容の指定」(7.2%)、「会話時のグループ分けの仕方」(12.0%)、「会話相手の参加態度」(9.6%)、「開催時期」(7.2%)、「開催回数」(7.2%)に関する記述が多く見られた。以下、「b. 要望する点」に関する各項目の学習者（未習者、既習者）の記述例を具体的に見る。

表4 中国人学習者の感想アンケート記述「b. 要望する点」の集計結果

項目	下位項目	未習者 68名中 記述件数		既習者 15名中 記述件数		全学習者 83名中 記述件数	
①会話教材	会話内容の指定	5	7.4%	1	6.7%	6	7.2%
	会話内容の比重	2	2.9%	2	13.3%	4	4.8%
	学習内容との関連付け	5	7.4%	0	0.0%	5	6.0%
②会話参加の仕方	会話時のグループ分けの仕方	9	13.2%	1	6.7%	10	12.0%
	会話相手の参加態度	5	7.4%	3	20.0%	8	9.6%
	媒介語の使用	1	1.5%	0	0.0%	1	1.2%
③情意面	不安・気まずさ	4	5.9%	1	6.7%	5	6.0%
④開催方法	開催時期	4	5.9%	2	13.3%	6	7.2%
	開催回数	2	2.9%	4	26.7%	6	7.2%
⑤オンラインの利用	対面の方が良い	1	1.5%	0	0.0%	1	1.2%
合計		38		14		52	

まず、「①会話教材」としては、「会話内容の指定」(7.2%)、「会話内容の比重」(4.8%)、「学習内容との関連付け」(6.0%)に関する記述が見られた。特に、「会話内容の指定」として、指定された内容を何回か練習した後、もう少し他の会話内容も扱って欲しい、日常会話で使える会話練習がしたいといった記述が見られた。また、未習者の中には、「学習内容との関連付け」を求める者もいた(7.4%)。

## ①会話教材

会話内容の指定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎がまだ足りない学生のために、事前に会話モデルを用意しておく必要がありますが、同じ内容の練習を繰り返していました。挨拶の内容だけでなく、他の会話モデルも追加して欲しいです。(C4 未習、和訳)</li> <li>・話の流暢さを実現するために、日常生活の場面での会話を練習したいです。(C16 未習、和訳)</li> </ul>
会話内容の比重	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お互いに自己紹介した後、自由会話の時間が足りないと思いました。(C28 既習、和訳)</li> <li>・自己紹介を減らして、その後のスピーチや質疑応答の練習をもっと増やして欲しいです。(C27 既習、和訳)</li> </ul>
学習内容との関連付け	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在はまだ日本語の入門段階にいるため、初心者にとってはまだ多くの会話練習が難しいです。今後は、日本語コースの進度に応じて計画・実施できることを期待します。(C29 未習、和訳)</li> <li>・会話練習を教科書の学習内容と組み合わせることができれば、私達が学んだ知識をより深く理解し、活用できるようになるかもしれません。(C30 未習、和訳)</li> </ul>

次に、「②会話参加の仕方」としては、「会話時のグループ分けの仕方」(12.0%)、「会話相手の参加態度」(9.6%)、「媒介語の使用」(1.2%)に関する記述が見られた。特に、「会話時のグループ分けの仕方」は、既習者と未習者を分けて欲しい、未習者の会話相手は中国人留学生の方が良い、グループに既習者がいるとより良い体験ができるといった記述が見られ、その割合は未習者(13.2%)の方が既習者(6.7%)より多く見られた。さらに、「会話相手の参加態度」としては、既習者が話し過ぎず未習者に配慮すべきだ、日本人学生にリードして欲しいといった記述が見られた。

## ②会話参加の仕方

会話時のグループ分けの仕方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ分けをより細かくし、既習者と未習者を適切に組み合わせる必要があります。(C17 未習、和訳)</li> <li>・未習者の会話相手としては、中国人の方がやりやすいです。また、会話相手が日本人で、グループに日本語が上手な学生がいる場合にも、より良い体験ができます。しかし、会話相手が日本人で、グループがすべて未習者の場合、会話はより面倒に感じますが、それは克服することができます。(C31 未習、和訳)</li> </ul>
会話相手の参加態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語能力がより高い人やおしゃべりな人は、自分の話す時間に気をつけて、まだ流暢に話せない人に配慮する必要があります。(C28 既習、和訳)</li> <li>・日本人学生にもっと会話をリードしてもらったら、もっと話す練習ができると思います。(C32 未習、和訳)</li> </ul>
媒介語の使用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本当に質問が理解できない場合は、中国語または英語の訳を教えて欲しいです。(C4 未習、和訳)</li> </ul>

そして、「③情意面」としては、「不安・気まずさ」(6.0%)に関する記述が見られた。特に、未習者の場合は、会話教材の内容を話し終わった後に何を話せばいいか困ったり、意志疎通がうまくできず不安になったりする者もいたようである。また、既習者も会話相手の日本側学生が内向的だと気まずくなるがあったと記述している者もいた。これらの不安・気まずさを解消するために、中国人学習者は「会話内容の指定」や「会話時のグループ分けの仕方」等を工夫して欲しいということを併せて記述していた。

### ③情意面

不安・気まずさ	・何度も話した話題について日本人学生と会話した後、何を言えばいいのかわかりません。教科書以外の言葉や文法しか分からない初期の段階では、少し恥ずかしい思いをします。(C33 未習、和訳)
	・もちろん、日本語の聴解や口頭能力が不足していたため、時々、お互いに理解できなかったり、誤解してしまったりして、少し気まずくなるがありました。(C21 未習、和訳)
	・日本人学生や留学生のほとんどが非常に熱心ですが、一部の学生はより内向的なので、私たちは日本語能力に限られているため、しばしば気まずい状況になるがありました。(C7 既習、和訳)

さらに、「④開催方法」としては、「開催時期」を遅くする(7.2%)、「開催回数」を増やす(7.2%)といった記述が見られた。特に、未習者にとって、自己紹介やスピーチ等をもとにした会話はまだ難しく、日本語学習がより進んでもう少し話せるようになった段階まで交流会を遅らせて欲しいと感じる者もいたようである。

### ④開催方法

開催時期	・2か月未満しか勉強していない初心者として、短い文で簡単な意見を表現することも簡単ではありません。日本人学生の返事や質問はよく分からず、理解しているふりをしていました。(C34 未習、和訳)
	・最初の自己紹介セッションから最後のスピーチセッションまでの間隔が短すぎると思います。多くの学生が明確で自然な原稿を自力で完成させることができませんでした。先生の助けを借りて原稿を作成したため、学生達は意味を完全に理解せずにそれを読むだけでした。そして、質疑応答では、多くの言いたいことを表現するのがまだ難しいです。そのため、スピーチセッションの時期をもう少し遅くした方がいいかもしれません。(C31 未習、和訳)
	・オンライン交流会の開催時期はもう少し遅くした方がいいと思います。基礎知識のない学生達の日本語能力は、日本人と会話するのにまだ足りず、貴重な機会を無駄にするかもしれません。(C35 既習、和訳)
開催回数	・このような交流会がこれからどんどん開催して、私達の日本語の能力をもっと向上させたいです。(C36 既習、ママ)
	・私はこの形式のコミュニケーションがとても好きです。日本語学習の次の学期にもこのような活動が行われることを願っています。(C37 未習、和訳)

最後に、「⑤オンラインの利用」としては、「対面の方が良い」(1.2%)という記述が見られた。

### ⑤オンラインの利用

対面の方が良い	・ネットで会話をしなくて、直接的に話すのはもっと良いと思います。(C25 未習、ママ)
---------	---

このように学習者が指摘する通り、今回のオンライン日中交流会では、会話教材の内容が一通り終わると、話すことがなくなり、沈黙してしまうグループも観察された。また、既習者が日本側学生と日本語で流暢に話し、未習者がほとんど参加できていないグループもあれば、既習者や日本側学生が未習者のために中国語等で通訳をしながら、全員が会話に参加できるように配慮しているグループもあった。あるいは、セッション4の学習者のスピーチに対して、日本人学生(学部生)が緊張のためか、全く質問やコメントをせず、沈黙が起きて、学習者同士で質疑応答するというグループも観察された。こうしたグループでのやり取りが上記のアンケート記述に現れていると言える。ここから、特に未習者は、会話教材をもとに自主練習を行って事前準備をしていたが、教材で指定された内容を超えて臨機応変に会話するのはまだ難しかったことが分かる。そ

れだけに、会話相手の日本人側学生や既習者が「歩み寄りの姿勢」で会話をリードしていく必要が一層あったと思われる。

## 5. 日本語教育学の授業受講生のレポート記述

日本側学生（日本語教育学の授業の受講生）には、交流会で観察した内容・感想（交流の内容、交流中の会話の特徴で着目して分析した点、中国人学習者の様子、新しい発見・気づいたこと、自身の日本語授業で取り入れたいこと等）を課題レポート1頁程度にまとめて提出することを課した（3.1参照）。そして、提出された課題レポートでは、交流会に参加した感想や気づき、今後の自身の日本語教育に取り入れていきたいことについて、表5のような記述が見られた（日本人学生、中国人留学生、その他の留学生の記述ごとに抜粋要約）。

表5 日本語教育学の授業受講生の課題レポートの記述（抜粋要約）

日本人学生	
学習者の様子	・学習者がとにかく知っている日本語で話してみたいというやる気に満ちあふれ、積極的に楽しく話そうとする熱意を感じた。日本人の外国語学習ではここまで積極的な学生はあまり見られないと思う。
	・学習者が事前に会話を予習して準備してくれてきたため、会話を広げてスムーズに進められた。
	・学習者同士が協力して、こちらに質問したりコメントしたりしてくれていた。
	・興味のある話題は、会話がはずんだ。
	・意思疎通がほとんどできなかったが、学習者が笑顔で質問等をしてくれたため、仲良くできたと感じた。
	・数回のセッションで同じ話題を繰り返しているおかげで、自らの発話形成は困っていなかったようであるが、こちらが話した固有名詞等が聞き取れず、戸惑う学習者が見られた。
	・分からないことを示してくれるので、こちらも媒介語や漢字を示す等対応がしやすかった。
自身の外国語学習の動機付け	・教師の全体への呼びかけに対して、学習者が臆することなく発言しており、自分も見習いたいと思った。
	・学習者が母語話者と会話できる機会があると学習意欲や会話能力が増すのだと実感した。自身の外国語学習でもそのような機会が欲しい。
	・自身の外国語学習は大変だが、頑張っている学習者を見て、自身の学習のやる気が上がった。
日本語教育への示唆	・学習者間に日本語レベル差がある場合は、レベルの低い学習者が会話に入れないことが見られたため、レベルの低い学習者に合わせる等、皆が楽しめるような日本語教育にする必要性を感じた。
	・学習者が臆することなく発言できるように、普段の授業での雰囲気作りが重要だと分かった。
	・初級のうちから実際のコミュニケーション場面を想定した実践的な練習を取り入れていく必要性を感じた。
	・今回は Zoom の普及で可能になった交流会だと思うが、今後もオンラインで交流を継続すべきだ。
中国人留学生	
中国人学習者の特徴	・日本語の勉強では「発音」「会話」「聴解」が難しいと述べる学習者が多かった。特に、母語にない発音を習得するのは難しいと感じた。これらは、中国人日本語学習者に共通して難しい点だと分かった。
日本語交流の必要性	・日本人または日本滞在経験のある外国人と日本語で会話する経験を学習者に与えることが重要だと分かった。
	・自然な挨拶の仕方や手振りを使ってコミュニケーションをする方法等が交流会で学べると思った。

その他の留学生	
学習者の様子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が全く分からない言語を母語とする学習者と日本語で話すのは初めてだったが、発音も聞き取りやすく、誤用もなく、事前によく準備してきたという印象を持った。</li> <li>・日本語を勉強しはじめたばかりの学習者だったが、日本語が上手だった。日本語が理解できない場合は、他の学習者が通訳してくれたので、すぐに通じた。</li> </ul>
日本語交流の必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国語習得の過程でその言語を用いて誰かとコミュニケーションをすることの重要性に気づいた。今後可能なら、日本人学生や教員だけでなく、様々な国の日本語学習者を繋げて、オンライン交流会を実施してみたい。</li> <li>・交流会では学習者になるべく日本語を多く使わせ、母語や英語で会話しないようにすることが必要だと思った。</li> </ul>

まず、日本人学生の場合は、「学習者の様子」として、学習者の話し方、積極性、事前準備の効果、学習者同士の協力姿勢、関係性の構築に言及しているものが見られた。また、意思疎通がうまく行かない場合の学習者の戸惑いや意思表示、自身の対応の仕方等について述べられていた。学習者の積極性や学習意欲を垣間見ることで、「自身の外国語学習の動機付け」となったという記述もあった。さらに、「日本語教育への示唆」として、日本語レベル差への対応、授業の雰囲気作り、実際のコミュニケーションの経験、オンライン交流等の重要性を指摘するものもあった。

そして、中国人留学生の場合は、日本語の「発音」「会話」「聴解」等の音声学習の困難点といった「中国人学習者の特徴」や、日本人もしくは日本滞在経験のある外国人と学習者との「日本語交流の必要性」を指摘するものがあった。さらに、その他の留学生の場合は、自身の知らない言語を母語とする初級学習者と日本語で話す経験となったことや、意思疎通が難しい際に通訳してくれる学習者がいた等の「学習者の様子」、および、今回自身が参加したように日本語を用いて様々な国の日本語学習者を繋ぐといった「日本語交流の必要性」について指摘する者もいた。

このように、日本語教育学の授業の受講生は、中国人学習者との交流から、学習者の様子を観察し、日本語教育で必要なことを意識化するだけでなく、自身の外国語学習の意欲を高める機会としていたと言える。

## 6. まとめ・教育への提案

以上、「オンライン日中交流会」に参加した中国人学習者が交流会に参加して良かった点と要望する点について、感想アンケートの記述をもとに分析した。さらに、交流会参加を通じた日本側学生の気づき、および今後の自身の日本語教育に取り入れていきたいことについて、課題レポートに記述された感想をもとに分析した。

その結果、学習者達は、交流会の「a.良かった点」として、「①会話教材」、「②会話参加の体験」、「③情意面」、「④動機付け」、「⑤オンラインの利用」に関することを挙げていた。特に、「④動機付け」の「日本語学習への意欲（他者からの励まし・刺激）」に関する記述が最も多く、半数以上の学習者が言及していたことから、会話相手や他の学習者と会話する中で励まされ、刺激を受けていたことが分かった。また、交流会の回数を重ねることで、「会話能力の向上」や「自信の獲得」をしていく様子も見られた。

このように、オンラインによる日中交流会の利点としては、以下のことが挙げられる。

### (1) 場所を越えた交流機会の提供・動機付けの強化：

オンラインによって場所を越えた交流が実現でき、学習者が「実際使用のアクティビティー」



の機会を得て、日本語学習や、音声を介した会話でのコミュニケーション、留学への動機付けが強化できる可能性を秘めている。これにより、学習者の会話能力の向上や社会・文化的知識の共有ができる機会となっていた。

(2) 多様な学生との交流：

今回の日中交流会で中国人学習者達は、東京外国語大学の日本人学生だけでなく、中国人留学生や他の国の外国人留学生とも日本語で話す機会を得ていた。

特に、(2)の点では、東京外国語大学の中国人留学生は、学習者の日本語レベルに合わせた日本語で話しつつ、中国語と日本語を使い分けながら会話を進行させるといった「歩み寄りの姿勢」で臨んでいたため、中国人学習者は安心して参加できたようである。また、日本語学習方法や日本留学に関する情報も留学生の先輩として提供しており、有益な交流の場となっていた。さらに、外国人留学生と日本語で話すという経験も、今後、学習者が日本に留学したら機会が増えるであろうことから、グローバルな環境での日本語使用の良い経験になったのではないと思われる。

さらに、中国人学習者が交流会に「b. 要望する点」としては、「①会話教材」、「②会話参加の仕方」、「③情意面」、「④開催方法」、「⑤オンラインの利用」に関することを挙げていた。これらの結果をもとに、今後のオンライン交流会での留意点としては、以下のことが挙げられる。

(3) 未習者用の会話教材の改善：

交流会で学習者が既習の語彙・文型をもとに、話しやすい話題を厳選しつつ、自由会話や日常生活で役立つ会話もある程度できるような会話教材の改善が必要である。

(4) グループ分け方法への配慮：

未習者と既習者が混ざっている方が媒介語等を用いて会話が進めやすい場合や、既習者ばかり話して未習者が参加しにくい場合がある。また、未習者の会話相手には中国人留学生が良いという意見もある。よって、グループ構成について慎重に検討する必要がある。

(5) 会話相手による調整：

学習者の不安を軽減して会話に参加しやすくするために、会話相手（日本側学生と既習者）が未習者にも理解しやすい日本語を用い、質問を投げかける等して話題をリードして積極的に展開できるようにする必要がある。

(6) 開催時期・回数の検討：

学習者の日本語レベルがもう少し高くなった時期に開催を遅らせ、自信を持って参加できるようにし、その後、継続して開催回数を確保していくべきである。

一方、日本側学生（日本語教育学の授業の受講生）は、中国人学習者との交流から、中国人学習者の話し方の特徴、積極性、学習者同士の協力姿勢、意志疎通への戸惑いといった様子を観察し、日本語教育で必要なことを意識するとともに、自身の外国語学習の意欲を高める機会としていたことが分かった。そして、こうした観察から、日本語レベル差への対応、授業の雰囲気作り、実際のコミュニケーションの経験、オンライン日本語交流等の重要性といった日本語教育への示唆を得ていたようであった。ここから、今後の日本語教員養成では、実際に日本語学習者と触れ合い、そこから日本語教育に必要なこと、自身の役割等について考えていける機会を提供することが必要であると言える。オンラインでの日本語交流会がその1つとなるだろう。

今後の課題としては、中国側学習者と日本側学生のオンライン交流会がより充実したものになるようにしていくことが挙げられる。実際、本研究で、2020年度の日中交流会に関する実践研究

を行うことで、交流会実施の利点と留意点がより明確に浮かび上がり、それをもとに、2021年11～12月に日中交流会を再度企画・実施した。実施に当たって改善した点としては、主に、開催時期を2週間ずらして学習者の日本語習得がある程度進んだところで交流会を行う、会話教材のモデル会話の語彙・表現・話題を追加するほか、既習者に未習者に合わせて日本語の調整や中国語通訳を入れる配慮をするように依頼する、既習者を金曜のセッションに集めてより高度な日本語での会話ができるようにするといった点である。また、日本側学生には、日本語授業の進度表・文型シラバスの確認、音声教材の吹込み、日本語の調整・意味交渉の強化をするように教師から指示するといった点も実施した。さらに、2020年秋学期の交流会の後、交流会の継続を希望する学習者がいたため、2021年春学期に学習者が中級後半に差し掛かった頃に行われる日本語プレゼンテーション大会の準備として、再度、オンライン日中交流会を開催した。この際、日本側学生が学習者のプレゼンテーションの練習相手となって質疑応答をするという活動を行った。

なお、本研究では、日本側学生の学びについて、データ収集・分析が十分にできなかった。今回の日中交流会では、日本側学生の学びのデータをより多く収集・分析し、その結果をもとに、日本語学習者と日本側学生の双方にとってより学び多き交流会にしていきたいと思う。今後も、オンライン交流会の実践とその効果の検証・改善といった「研究と実践の連携」(中井2012)を行い、より良い交流会を活発に実施していきたい。

## 付記

本研究は、2019～2021年度科学研究費(基盤研究(C))「インターアクション能力育成のための会話データ分析の手法を学ぶ教材開発とその検証」(19K00702、研究代表者:中井陽子)、および、東京外国語大学大学院国際日本学研究院2021年度競争的経費の成果の一部である。オンライン日中交流会実施にご協力くださった長春の先生方、および、本研究にご協力くださった皆様にお礼申し上げます。

## 注

- (1) 独立行政法人日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査」によると、日本での外国人留学生数は、2019年まで増加傾向にあったが、2020年に減少した。この減少は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響のため、パンデミックが収束すれば、再び外国人留学生数が増加するのではないかと考えられる。また、同調査の「国地域別留学生数上位5か国」によると、中国人留学生数は2018年(114,950人)、2019年(124,436人)、2020年(121,845人)で連続1位である。
- (2) 楊(2008)は「言語学習観」について、板井(2000)を引用して、「学習者が言語学習に対して意識的・無意識的に抱いている態度や意識である」と述べている。
- (3) プログラム詳細は、中井(2021a, b)、中井・夏(2021)を参照のこと。
- (4) 既習者は、2020年10月～2021年6月までの初級～中級の日本語授業履修を免除になっている者もいたが、オンライン日中交流会には参加する者がいた。なお、本研究で既習者と認定した学習者は、みな2021年3月～7月の初級後半～中級後半の日本語授業でN1相当レベルのクラス分けをされた者である。
- (5) セッション3では、4班の中国人学習者が他の授業があるため参加せず、代わりに、セッション1と4に4班の学生の半分ずつがそれぞれ2回ずつ参加できるようにした。
- (6) 交流会の参加者リストは作成していたが、当日の欠席者等も見込まれるため、グループ分けは、当日の参加者数を見てから、その場でランダムに分けていた。
- (7) 「OJAD オンライン日本語アクセント辞書」のサイトにスピーチ原稿をコピーすると、その文章のピッ

チパターンが確認でき、また自動読み上げ機能も利用できるため、学習者が音声を確認しながらスピーチ練習を自律的に行える。

## 参考文献

- 板井美佐 (2000) 「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS について - 香港 4 大学のアンケート調査から -」『日本語教育』104, pp.69-78.
- 岡崎敏雄 (1994) 「コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化 - 日本人と外国人の日本語 -」『日本語学』13 (13), pp.60-73.
- 岡部真理子 (1997) 「実践企画ビジターセッションのすすめ - インターアクション能力を高めるために」『月刊日本語』10 (8), pp.34-39.
- 尾崎明人・J. V. ネウストブニー (1986) 「インターアクションのための日本語教育 - イマーシブプログラムの試み -」『日本語教育』59, pp.126-143.
- 許明子・金東奎・姚艶玲 (2014) 「中級レベルの日本語学習者のコミュニケーション能力の現状とニーズ - 日本・中国・韓国の学習者を対象とした調査と実践を通して -」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』29, pp.1-17.
- 小林明子 (2008) 「中国人留学生の日本語コミュニケーション意欲に関する研究」『留学生教育』13, pp.41-49.
- 坂本裕子 (2004) 「第二言語習得における学習の動機付けと学習意欲 - 中国人日本語学習者の事例 -」『言語コミュニケーション研究』4, pp.60-76.
- 関崎博紀 (2009) 「中国人日本語学習者の言語学習観の調査 - 中央民族大学外国語学院日語専攻の場合 -」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』24, pp.37-50.
- 独立行政法人日本学生支援機構 「外国人留学生在籍状況調査」  
(<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/index.html>) (2021 年 11 月 20 日)
- 中井陽子 (2003) 「談話能力の向上を目指した会話教育 - ビジターセッションを取り入れた授業の実践報告 -」『講座日本語教育』39, pp.79-100.
- 中井陽子 (2010) 「第 2 章作って使う第 1 節モデル会話を作成して用いる」尾崎明人・椿由紀子・中井陽子 (著) 『日本語教育叢書「つくる」会話教材を作る』関正昭・土岐哲・平高史也 (編) スリーエーネットワーク, pp.40-79.
- 中井陽子 (2012) 『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房
- 中井陽子 (2021a) 「キャリア形成と人間関係構築のための授業実践 - 2019 年度中国赴日本国留学生予備教育における団長授業での試み -」劉桂萍 (主編)、辺家勝 (副主編) 『日本語教育論集』9 国際シンポジウム篇 中国赴日本国留学生予備学校日本語教育研究会, 東北師範大学出版社, pp.84-108.
- 中井陽子 (2021b) 「話し合いの仕方の変遷プロセスの分析 - 中国人日本語学習者を対象としたオンライン授業を対象に -」『東京外国語大学論集』102, pp.99-110.
- 中井陽子・夏雨佳 (2021) 「談話技能教育における『研究と実践の連携』の循環プロセス - 中国人日本語学習者と日本人学生が参加するオンライン会話倶楽部の活用を焦点を当てて -」『東京外国語大学国際日本学研究』創刊号, pp.84-102.
- 長坂水晶・木田真理 (2011) 「中国の大学の日本語授業における会話指導に関する調査 - 中・上級レベルを対象とした教室活動の実態と教師の意識 -」『国際交流基金日本語教育紀要』7, pp.43-57.
- 中西久実子 (2019) 「Skype による日本語会話交流の効果とファシリテーターの役割 - 日本語学習者と日本語教員のめざす学生との日本語会話交流の調査データから -」『無差』26, pp.21-37.
- 永山友子・武田誠・福永由佳・土井眞美 (2006) 「接触場面の実態を反映した日本語教育に向けて - 留学生と日本人大学生の共同作業場面における『確認』の分析をもとに -」国立国語研究所 (編) 『日本語教育の新たな文脈 - 学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性 -』アルク, pp.142-171.
- ネウストブニー, J.V. (1991) 「新しい日本語教育のために」『世界の日本語教育』1, pp.1-14.
- ネウストブニー, J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 副島健作・金城尚美・武藤彩加 (2014) 「中国における日本語学習者の日本語力に影響を及ぼす外的学習者要因」『国際文化研究科論集』22, pp.19-31.
- 本田明子 (2013) 「学習者と母語話者のインターアクションによる日本語学習の可能性 - 立命館アジア太平

- 洋大学における地域交流授業の実践から－』『立命館言語文化研究』24 (3), pp.131-141.
- 溝口博幸 (1996) 「初級日本語学習者の学習意欲－日本人との接触場面を含んだ学習『にほんじんのゲストとはなしましょう』の場合－』『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』3, pp.86-100.
- 宮崎里司 (1999) 「インターアクション能力の習得を目指したイマーシジョンプログラム：98年度早稲田・オレゴンプログラムでの試み』『講座日本語教育』34, pp.197-211.
- 宮崎里司 (2000) 「パソコンテレビ会議システムを利用した日本語教育の試み』『留学生教育』5, pp.91-107.
- 宮崎里司 (2002) 「接触場面の多様化と日本語教育：テレビ会議システムを利用したインターアクション能力開発プログラム』『講座日本語教育』38, pp.16-27.
- 宮副ウォン裕子・上田美紀・渡辺民江 (2003) 「カンパセーション・パートナー・プログラムの参加者は何を学びあったか－中部大学生と香港理工大学生の双方向的学習の調査と分析－』『留学生教育』8, pp.201-220.
- 村岡貴子 (2001) 「大阪大学短期留学特別プログラム OUSSEP 上級日本語クラスにおけるビジターセッション－2000年春学期の実践報告－』『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』5, pp.113-126.
- 村岡貴子・中山亜紀子 (2000) 「大阪大学短期留学特別プログラム OUSSEP の日本語クラスにおけるビジターセッション－1999年春学期の実践報告』『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』4, pp.67-76.
- 村岡貴子・三牧陽子 (2000) 「大阪大学豊中キャンパスにおける『日本語パートナー』の特性と活動－1999年第1学期の実践報告および考察』『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』4, pp.55-65.
- 村岡英裕 (1992) 「実際使用場面での学習者のインターアクション能力について『ビジターセッション』場面の分析』『世界の日本語教育』2, pp.115-127.
- 楊峻 (2008) 「グループワークの経験が中国人学習者の言語学習観に及ぼす影響－日本語専攻主幹科目の受講生を対象とする実証的研究－』『世界の日本語教育』18, pp.113-131.
- 尹智鉉 (2004) 「ビデオ会議システムを介した遠隔接触場面における言語管理－『turn-taking』と処理過程をめぐって－』『世界の日本語教育』14, pp.35-52.
- 尹智鉉 (2013) 「遠隔の JFL チュートリアルにおける相互作用と参加の様相』『e-Learning 教育研究』8, pp.14-25.
- 横須賀柳子 (2003) 「ビジターセッション活動の意義とデザイン」宮崎里司・ヘレン・マリオット (編) 『接触場面と日本語教育 ネットワークのインパクト』明治書院, pp.335-352.
- 「OJAD オンライン日本語アクセント辞書」東京大学大学院 工学系研究科 峯松研究室 / 情報理工学系研究科 廣瀬研究室 〈<http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad>〉 (2021年11月20日)

(なかい ようこ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授)  
 (てい いちぜん 東京外国語大学総合国際学研究科国際日本専攻 博士後期課程)  
 (か うか 東京外国語大学総合国際学研究科国際日本専攻 博士後期課程)

【資料1】会話教材

中日交流会話セッション

担当：中井暢子

セッション1、2：11月2日（月）～6日（金）

1) 表現：日本語が分かりません

- もういちど おねがいします。(请再说一遍)  
Moo ichido onegai-shimasu.
- Xって なんですか。(X是什么?)  
X tte nan desu ka?
- Xって 英語/中国語で なんですか。(X的英语/中文怎么说?)  
X tte eigo de nan desu ka?
- すみません、漢字で書いてください。(不好意思，请你写汉字。)  
Sumimasen, Kanji de kaite kudasai.
- えっ? ん? (什么? 嗯?)  
E? N?

2) 新しい友達のことを聞く・話す (跟你的新朋友问一问，说一说)

①名前(名字)

東京外国語大学の学生(A)	博士班の学生(B)
A: はじめまして。 Hajimemashite. 初次见面。	B: はじめまして。 Hajimemashite. 初次见面。
A: 私は、(your name) です。 Watashi wa (your name) desu. 我是(名字)。	B: (As name) さん ですな。 (As name) san desu ne. (名字) 对吗?
A: はい、そうです。 Hai, so desu. 是的。	
A: お名前は何? O namae wa? 你叫什么名字?	B: (your name) です。 (your name) desu. 我叫(名字)。
A: (B's name) さん ですな。 (B's name)-san desu ne? [確認] (名字) 对吗?	B: はい、そうです。 Hai, so desu. 是的。
A: どうぞ よろしく おねがいします。 Doozo yoroshiku onegai-shimasu. 请多关照。	B: どうぞ よろしく おねがいします。 Doozo yoroshiku onegai-shimasu. 请多关照。

②出身(出生地)

東京外国語大学の学生(A)	博士班の学生(B)
A: 出身は どこですか。 Shushin wa doko desu ka? 你来自哪里?	B: (Birth place) です。 (Birth place) desu. (出生地)
A: 漢字を 書いて ください。 Kanji o kaite kudasai. 请写下汉字。	B: これです。[写你的出生地] Kore desu. 是这个。
A: 中国の どこ ですか。 Chugoku no doko desu ka? 在中国的哪里呢?	B: 中国の(北/南/西/東/東北) です。 Chugoku no (kita/minami/nishi/higashi/tohoku) desu. 在中国的(北方/南方/西部/东部/东北部)。
A: そうですか、わかりました。 Soo desu ka. Wakarimashita. 这样啊，我知道了。	B: ~さんの 出身は どこ ですか。 ~san no shushin wa doko desu ka? ~是来自哪里呢?
A: (your birthplace) です。 (your birthplace) desu. (出生地)	B: 漢字で お願いします。 Kanji o kaite kudasai. 请写下汉字。
A: これです。[写你的出生地] Kore desu. 是这个(出生地)。	B: 日本の どこ ですか。 Nihon no doko desu ka? 在日本的哪里呢?
A: 日本の(北/南/西/東/東北) です。 Nihon no (kita/minami/nishi/higashi/tohoku) desu. 在日本的(北方/南方/西部/东部/东北部)。	B: そうですか、わかりました。 Soo desu ka. Wakarimashita. 这样啊，我知道了。

③博士班の学生の日本語の勉強(博士班学生的日语学习)

東京外国語大学の学生(A)	博士班の学生(B)
A: 毎日、日本語を 勉強しますか。 Mainichi nihongo o benkyo shimasu ka? 你每天都学习日语吗?	B: はい、そうです。毎日、日本語を 勉強します。 Hai, soo desu. Mainichi nihongo o benkyo shimasu. 是的，每天都学习日语。
A: 日本語の勉強は、どうですか。 Nihongo no benkyo wa doo desu ka. 日语学习怎么样?	B: 日本語の勉強は、とても おもしろいです。 Nihongo no benkyo wa, totemo omoshiroi desu. 日语学习很有趣。 日本語の勉強は、少し 難しいです。 Sukoshi muzukashi desu. 日语学习有点难。
A: 日本語の勉強で、何が 難しいですか。 Nihongo no benkyo de nani ga muzukashi desu ka? 日语学习的哪里比较难呢?	B: 日本語の勉強で、(文法/発音/聴解/会話)が 難しいです。 Nihongo no benkyo de (bunpo/hatsuson/chokai/kaiwa) ga muzukashi desu. 日语学习的(文法, 发音, 听力, 会话)比较难。

④ 東京外国語大学の学生の勉強 (東京外国語大学学生的学习)	
東京外国語大学の学生(A)	博士班の学生(B)
A: (grade)年生/研究生/大学院生です。 (grade)/kenkyusei/daigakuinsei desu. 我是(年级)年生/预科生/研究生。	B: 大学の何年生ですか。 Daigaku no nan nensei desu ka? 你现在大学几年级呢?  B: ああ、そうですか。 Aa, so desu ka. 啊, 这样啊。
A: (foreign language)語を勉強します。 (foreign language) go o benkyo shimasu. 我在学(外语)。	B: 大学で何を勉強しますか。 Daigaku de nani o benkyo shimasu ka? 你在大学里学什么呢?
A: (foreign language)です。 (foreign language) desu. 是(外语)。	B: すみません、もう一度、お願いします。 Sumimasen, mo ichido onegai shimasu. 不好意思, 请再说一遍。
A: これは。[写外国語] Kore desu. 是这个。	B: 書いてください。 Kaite kudasai. 请写下来。
A: はい、どうぞ。 Hai, dozo. 好的。	B: ちょっと待ってください。辞書を見ます。 Chotto matte kudasai. Jisho de shirabemasu. 稍微等一下。我查一下词典。
A: ありがとうございます。 Arigato gozaimasu. 谢谢。	B: ああ、分かりました。いいですね。 Aa, wakarimashita. Ii desu ne. 啊, 我知道了。很好啊。
A: (文法/発音/聴解/会話)が難しいです。 (bunpo/hatsuon/chokai/kaiwa) ga muzukashi desu. (文法, 发音, 听力, 会话) 比较难。	B: (foreign language)語の勉強で、何が難しいですか。 (foreign language) no benkyo de nani ga muzukashi desu ka? (外语) 的学习哪里比较难呢?  B: ああ、そうですか。 Aa, so desu ka. 啊, 这样啊。

⑤ 趣味 (兴趣爱好)	
東京外国語大学の学生(A)	博士班の学生(B)
A: 趣味は何ですか。 Shumi wa nan desu ka? 你的兴趣爱好是什么?	B: (hobbies) です。 (hobbies) desu. 是(兴趣爱好)。
A: ああ、そうですか。いいですね。 Aa, soo desu ka. Ii desu ne. 这样啊, 很好啊。	
A: (hobbies) です。 (hobbies) desu. 是(兴趣爱好)	B: 趣味は何ですか。 Shumi wa nan desu ka? 你的兴趣爱好是什么?  B: ああ、そうですか。いいですね。 Aa, soo desu ka. Ii desu ne. 这样啊, 很好啊。

⑥その他の話題: 時間があれば (其他的话题: 有时间的话) セッション3: 11月11日 (水)

- 1) 何をよく食べますか。(你爱吃的是什么?)  
 Nani o yoku tabemasu ka?  
 日本の食べ物は、何が好きですか。(你喜欢什么日本食物?)  
 Nihon no tabemono wa, nani ga suki desu ka?  
 中国の食べ物は、何が好きですか。(你喜欢什么中国食物?)  
 Chugoku no tabemono wa, nani ga suki desu ka?
- 2) 何をよく飲みますか。(你爱喝什么?)  
 Nani o yoku nomimasu ka?  
 中国茶が好きですか。(你喜欢中国茶吗?)  
 Chugokucha ga suki desu ka?  
 どんなお茶が好きですか。(你喜欢哪种茶?) / コーヒーは? (咖啡吗?) / ジュースは? (果汁吗?)  
 Donna ocha ga suki desu ka? Kofi wa? Jusu wa?
- 3) 週末、何をよくしますか。(周末你一般都做什么?)  
 Shumatsu, nani o yoku shimasu ka?  
 例) 勉強します / 買い物します / ゲームします / 映画を見ます / バイトします / 寝ます  
 eg.) Benkyo-shimasu / Kaimono-shimasu / Gemu-shimasu / Eiga o mimasu / Baito-shimasu / Nemasu.  
 (例子: 学习, 买东西, 玩游戏, 看电影, 打工, 睡觉)
- 4) 今、一番、何を買いたいですか。(现在你最想买的东西是什么?)  
 Ima, ichiban, nani wo kaitai desu ka?  
 例) パソコン / プリンター / ゲーム / 服 / 鞆 / 本 (例子: 电脑, 打印机, 游戏, 衣服, 包, 书)  
 eg.) Pasokon / Purinta / Gemu / Fuku / Kaban / Hon
- 5) 1日に何時間勉強しますか。(你一天都学习几个小时呢?)  
 Ichiniti ni nan jikan benkyo-shimasu ka?  
 何時に起きますか。(几点起床) / 何時に寝ますか。(几点睡觉)  
 Nan ji ni okimasu ka? / Nan ji ni nemasu ka?
- 6) 留学しますか。どこに留学したいですか。(你想留学吗? 想去哪里留学呢?)  
 Ryugaku-shimasu ka? Doko ni ryugaku-shitai desu ka?

⑦感謝の挨拶 (寒暄感谢)

とうきょうがいがくごだいがく がくせい 東京外国語大学の学生(A)	はかせはん がくせい 博士班の学生(B)
A: ありがとうございます。 Arigatoo-gozaimashita. 谢谢。	B: ありがとうございます。 Arigatoo-gozaimashita. 谢谢。
A: とても 楽しかったです。 Totemo tanosikatta desu. 今天很开心。	B: 私も とても 楽しかったです。 Watashi mo totemo tanosikatta desu. 我今天也很开心。
A: さようなら。 Sayoonara 再见。	B: では、しつれい します。 Dewa, shitsuree-shimasu. 那就到这里吧。  B: さようなら。 Sayoonara 再见。

## **The Merits and Potential Issues of Online-Conversation Sessions:**

### **Based on an Analysis of Comments by Chinese Learners of Japanese Who Intend to Study in Japan and Undergraduate/Graduate Students in Japan**

**NAKAI Yoko, DING Yiran, XIA Yujia**

**KEYWORDS:** Chinese learners of Japanese, Online, Conversation Sessions, Oral Communication, Performance activities

In this study, the authors examined the merits and potential issues involved in conducting online-conversation sessions between Chinese learners of Japanese who intend to study in Japan and undergraduate/graduate students in Japan.

Analysis of the learners' comments on the merits of the online-sessions revealed that the learners' motivation to learn Japanese and to study in Japan was raised through the experience of engaging in authentic communication in Japanese across the countries. As a result, the learners had opportunities to acquire conversational competence and social-cultural knowledge, as well as to communicate in Japanese in a global setting, such as talking with Japanese students and international students from China and other countries studying in Japan. Notably, Chinese students in Japan readily adjusted to using easy Japanese (and Chinese where necessary) according to the Japanese levels of the Chinese learners of Japanese in China and provided them with information about studying Japanese and staying in Japan. On the other hand, potential issues in conducting online-conversation sessions are developing suitable conversational materials and carefully considering issues such as group formation and conversation partners' adjustments for learners who just started studying Japanese.

In addition, undergraduate/graduate students in Japan had the opportunity to observe the unique features of Japanese spoken by Chinese learners as well as the enthusiasm and cooperation among learners, and to notice important considerations for Japanese teaching. Moreover, they found that the Chinese learners' enthusiastic attitude towards speaking Japanese motivated them in their own foreign language study endeavors.

In the future, the authors will continue to conduct this online-conversation session with consideration given to the merits and potential issues analyzed in this study in the hope of presenting all the more fruitful communication opportunities to students both in China and in Japan.